

初めて聞く、戦没者遺族の生の話―

「平和」は当たり前じゃないと知った

中学生が初参加「伊達市戦没者追悼式」開催
鎮魂の祈りと平和への願いを継ぐ

▲遺族の壮絶な苦労や、未だ 112 万もの遺骨が海外にある事実を伝え、今の平和が尊い命の犠牲の上に成り立っていることを訴える山崎さん

11月7日㊦、伊達市戦没者追悼式が行われ、戦没者遺族など60人が参列しました。全員で黙とうをささげたあと、須田市長が戦没者の御霊2867柱に対し、哀悼の意を表しました。

今年から市内中学校6校の代表生徒が式典に出席することになりました。これは戦争の悲惨さを後世に伝え、改めて平和の尊さを生徒たちに理解してもらうための取り組みです。参列し

た12人の生徒はそれぞれ祭壇に花を供え、戦没者の冥福を祈りました。

父を戦争で亡くした山崎正伸さんが、戦後の食糧難の時代を、想像を絶する苦労の下に過ごした経験を語ると、生徒たちは息をのんで話に聴き入り、心に受け止めている様子でした。



▲「戦争の悲惨さを未来へ引き継ぎ、健幸で希望あふれる伊達市をつくる」と述べた須田市長

Interview

私たちのような遺族を
二度と出さないために

伊達市遺族会連合会
会長 佐藤 悦三 さん

私は満州で生まれ終戦で帰国しましたが、満州鉄道の社員だった父は戦後ソ連に抑留され生き別れになりました。当時3歳だった私は写真でしか父のことを知りません。

日本人の9割が戦争を知らない年齢となり、遺族会の会員数も年々減っています。そのような中、私たちのような遺族を二度と出してはな

らないことを、次世代に伝えていかなければなりません。学校教育の中で、さまざまな手段を使って日本の歴史の歩みを認識してもらうことが、戦争を知らない世代に伝えていくために大切だと思います。

Voice

被害にあった人のことを
次世代に伝えたい

梁川中学校 2 年
服部 楽 さん

戦時下での暮らしやお父さんが戦争に行き残されたお母さんの苦労を初めて聞いて勉強になった。平和が当たり前ではないことを忘れかけていると思うので、戦争の悲惨さを次の世代に伝えていきたい。

Voice

戦争は何も生まない
戦争を忘れないことが大事

私の曾祖父も戦争で亡くなっているが、友達の曾祖父は最近まで生きていてくれたと聞いて、戦争がなければよかったと思った。戦争は何も生まないし、誰も幸せにならない。戦争を忘れず伝えることが大切だと思った。



伊達中学校 2 年
五十嵐 諒也 さん